

令和 3 年 6 月 20 日現在

機関番号：32633

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2020

課題番号：18K17504

研究課題名（和文）再発大腸がん患者の「生を支える力」の尺度開発

研究課題名（英文）Development of a scale of "resilience" for patients with recurrent colorectal cancer

研究代表者

八巻 真紀子（YAMAKI, Makiko）

聖路加国際大学・大学院看護学研究科・助教

研究者番号：90803776

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,500,000 円

研究成果の概要（和文）：大腸がん患者に対する研究動向として特定の病期の大腸がん患者を研究した論文は少なく、本研究においての有用性を確認することができた。がん患者のレジリエンスへの影響要因についてスコopingレビューを行い、がん患者のレジリエンスの特徴について考察し、結果各々の要因間には、複雑な多様性をもつ関連性が示唆された。分析していく中で、先行研究で研究者が明らかにした「生を支える力」はRutter (1985)の述べるレジリエンスの概念や、その他の研究者が定義する概念に似ていることが示唆された。「生を支える力」とレジリエンスは同じ概念であることが明らかとなり尺度にはレジリエンスに則り開発していくことが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

大腸がん患者は死亡数また罹患率が高く、再発大腸がん患者は、再発や転移を繰り返すといった長期的な療養を強いられた経験を持つ者も多い。様々な苦難に直面しながらもがんと共に生きる体験を、研究者は先行研究として長期療養生活を送る再発大腸がん患者が持つ力として「生を支える力」を明らかにした。今回の研究では、「生を支える力」の尺度開発を行い測定可能なものとするを目的としたが、「生を支える力」についての概念を明らかにする過程として、似た概念を持つ可能性もあるレジリエンスについての概念分析を行った結果、同じ概念であることが明らかとなり、尺度にはレジリエンスに則り開発していくことが明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：There have been few studies of colorectal cancer patients at specific stages of the disease, so we were able to confirm the usefulness of this study. I conducted a scoping review of the factors that influence the resilience of cancer patients, and discussed the characteristics of resilience in cancer patients, and the results suggested a complex and diverse relationship between each factor. In my analysis, I suggested that the "Vitality to support patients suffering with recurrent" identified by researchers in previous studies is similar to the concept of resilience as described by Rutter (1985) and defined by other researchers. It is clear that resilience and the "Vitality to support patients suffering with recurrent" are the same concept, and that the scale should be developed in accordance with resilience.

研究分野：看護研究

キーワード：再発大腸がん 大腸がん患者 レジリエンス がん患者 患者体験

1．研究開始当初の背景

がん診断・治療の進歩による生存率の上昇に伴い、がんサバイバーの長期的な健康問題への対策が求められている。特に大腸がんに関する我が国の動向は2015年の死亡数、男性約2万6000人、女性約2万2000人であり、がんによる死亡全体に占める大腸がんの割合は、男性は43.9%、女性は35.6%である。また性・部位別にみた悪性新生物死亡数の順位をみると、大腸がんは2015年で、男性は第3位、女性は第1位であり、罹患率として男女ともに約14%と依然として多くの人々が罹患している状況もあり、大腸がんの5年相対生存率は2003年～2005年診断時で男性は大腸70.3%、女性は大腸67.9%であり、他のがんと比較しても生存率が高い。雑賀らの研究からも大腸がんの場合、進行がん患者であっても、生存率が高いということが示され¹⁾、大腸がんは長期療養生活を送る可能性が高いことが推測される。大腸がんは、予後が他のがん種と比較しても比較的良好で、また治療も多岐に渡る。また罹患率の上でも男性は第3位、女性は第2位と国民に占める割合が多いため、日本人にとって身近ながん種の一つである。しかしある程度がんが進行するまで無自覚であることが多く、発見時にすでに大腸がんが進行した状態であることも少なくない。またがんが進行していた場合には、再発転移のリスクが高まる。そういった状況の中で、大腸がん患者はがんと共に生きる時間が長期間にわたる者も多く見受けられる。がんと診断されたことで大きな衝撃を受け、しかし精神的に何とか立て直し治療へと臨む。もし転移や再発が見られた場合には再度治療が再開され、更に自分の日常生活の再構築が必要とされる。精神的にも再発を経験する中で、自分自身の命の期限について考え不安な日々を過ごしている。こういった大腸がん患者の状況を臨床の現場でも知ることがあり、研究者は先行研究で再発大腸がん患者が「生を支える力」を持ち生きていることを明らかにし、「生を支える力」の3つの構成要素についても明らかにした。本研究では、この「生を支える力」を再発大腸がん患者が高め、質の高い療養生活を送ることができるよう、「生を支える力」の尺度開発を行い、測定可能なものとする。

2．研究の目的

これまで研究者は再発大腸がん患者が、がんと共に生きる体験に着目し、存在論的視点から現象学的手法を用いて研究を行い、再発大腸がん患者が「生を支える力」を持つことを明らかにした。人の内面に目を向け人が生きるということはどういうことなのかといった存在論的視点から探究し「生を支える力」について明らかにした。また「生を支える力」は「発症前から大事にしていた日常を継続させる」、「自己コントロールしようと前向きに努力する」、「今を精一杯生きる」の3つの要素を内包していた。本研究では先行研究も参考にし「生を支える力」のアイテムプールを抽出の上、普遍性のあるものとして提示し、再発大腸がん患者が高め、質の高い療養生活を送ることができるよう、「生を支える力」についての尺度開発を行うことを目的とした。

3．研究の方法

本研究は、再発大腸がん患者の「生を支える力」を普遍性のある手法で測定することであった。その手段として「生を支える力」の尺度開発を行うことを目的としていた。本研究ではまず、先行研究やインタビュー調査から「生を支える力」のアイテムプールの抽出を行い、「生を支える力」の尺度開発を行うことを当初の流れとしていた。まずは、計画書申請時から時期が経過したため、再度大腸がん患者の現状として統計的推移を確認し、大腸がん患者を対象とした研究動向について調査した。研究者が明らかにした「生を支える力」が既存の概念と類似している可能性

を考慮し、がん患者のレジリエンスにおける影響要因のスコーピングレビューを行った。そこで分析していく中で、先行研究で研究者が明らかにした「生を支える力」はレジリエンス と似た概念であることが示唆され、レジリエンスの概念分析を行った。

4．研究成果

(1) 大腸がん患者の統計的推移の現状

最新の国立がん研究センターの統計によると、2017 年大腸がんに関する我が国の動向は死亡数も男性第 3 位、女性第 1 位、男女合計すると第 3 位ともに高く、2014 年の罹患率についても男性は第 3 位、女性は第 1 位であり、男女合計すると第 2 位と非常に多くの患者が存在している。こういった現状を踏まえ、大腸がん罹患、また死亡する患者が増加すると共に、再発大腸がん患者も増加傾向にあることが予想され研究を行う上で対象となる患者数の増加が更に見込まれると同時に、本研究の有用性が示された。

(2) 大腸がん患者を対象とした研究動向

研究動向としては、現状としても初期診断時、治療期、再発時点といった特定の病期の大腸がん患者を研究した論文は少なく、また大腸がん患者に対する精神面に関する研究としては、ストーリー造設に伴うものが存在していることが明らかであった。それにより、本研究の独自性は明らかとなった。

(3) がん患者のレジリエンスにおける影響要因のスコーピングレビュー

がん患者のレジリエンスにおける影響要因のスコーピングレビューでは、文献データベースに Embase、PubMed を用いた。キーワードは、「がん」「レジリエンス」「コホート研究」「前向き研究」「後ろ向き研究」とし、論文の年数は限定せずに英語文献を対象とした。また論文の種類は会議録等を除き、選択基準は、成人がん患者のレジリエンスに影響を与える要因についての内容を含む研究とした。また、がん患者のレジリエンスという特定の要因に暴露しその影響要因について、一定の期間を観察していく研究手法の 1 つであるコホート研究、また同じくある一定の期間での観察をしていく研究として前向き研究、後ろ向き研究を研究手法として限定し文献検索を行った。その結果、キーワード検索より 171 文献が抽出され、データベース間の重複した文献を除外すると 133 文献となった。そこからタイトルと要約を精読後、16 文献となり、本論を精読後に抽出された 6 文献をレビュー対象とした。研究デザインは対象となった文献すべて前向き研究であった。また各論文の研究対象となった患者は合わせて約 4000 人であった。この研究は、スイス、オーストラリア、アメリカ合衆国で実施されており、その内 1 件の研究は、研究対象となった場所が報告されていなかった。対象となった患者の年齢について書かれていない文献が 1 件、男性と女性の数について書かれていない文献が 1 件あった。また研究対象となった患者の約 610 人が男性で、約 3255 人は女性であった。年齢は 29～87 歳であった。レジリエンスに影響を与える要因を抽出しカテゴリー化したところ、6 カテゴリーが示唆された。それにより、各々の要因間には、複雑な多様性をもつ関連性が示唆され、カテゴリーは理論や概念による説明をすることが可能なものも複数見受けられた。今回の研究ではがん患者のレジリエンスにおける影響要因についての概観を示すことができ、これにより本研究におけるレジリエンスの概念分析の必要性へ繋ぐことができた。

(4) レジリエンスの概念分析

研究者の先行研究で明らかにした「生を支える力」と似た概念として考えるレジリエンスについて、Rutter は、人間には本来、不運な出来事に直面した時に、防御する機能があると述べ、それをレジリエンスと定義しており、向井らは、がん患者ががんと共にある生活の中で生じる心身のストレスに対して様々な対処方法を見出し問題解決していることを明らかにしていた²⁾。このように人間には、過酷な現実と直面した時に、自分で対応していく能力を兼ね備えているとされている。長期に渡り療養生活を送る再発大腸がん患者も、これまで、いくつかの困難に直面してきたが、そのような状況でも生き、レジリエンスに基づく能力としての対処をしてきたのではないかと考える。先に行ったがん患者のレジリエンスにおける影響要因のスコーピングレビューや、前述した観点から「生を支える力」は、レジリエンスと似た概念ではないのかと考えた。そこでがん患者のレジリエンスに関する概念分析を行い、そこから、大腸がん患者のレジリエンスに関する文献等の検索も行ったが、再発大腸がん患者におけるレジリエンスに関する文献は見当たらなかった。そこで、再発大腸がん患者の特性について考慮し、改めて概念分析を行った。

レジリエンスの性質として、元の精神的に健康な状態に戻ろう、立ち直ろうとする肯定的な力⁵⁾、不運な出来事に直面した際に、精神医学的疾患に対する防御機能であるということ^{5,6)}、ネガティブな出来事から立ち直る、弾性力、回復力³⁾、状況に適応することができる精神的回復力⁴⁾、うまく適応するプロセス⁸⁾、逆境からの心理的回復力⁸⁾、ストレスに対する防御や抵抗力⁶⁾、うまく適応できる能力⁶⁾、肯定的自己感や自尊心といった要素を持ち合わせ、更にその現象の捉え方や自己コントロール能力、対処しても思い通りにいかない自分を振り返られる能力も含まれる⁶⁾こういった自信を肯定的に自尊心を持ち、レジリエンスを人間が持ち合わせているものと捉えられている。またレジリエンスを弾性力や回復力といった心理的な力の要素として定義するのみならず、その力を発揮する過程についても定義づけている^{1,6,8)}。そういった元来のレジリエンスについての定義からも、がん患者におけるレジリエンスは、がんという自分に対して肯定感や自己効力感を高めることで、忍耐強さと前向きな気持ちを発揮し、がんという体験に対する受容をより促進させる。そして様々なストレスに対して自己コントロールして、家族やキーとなる人々との関係性を強化しストレスを受け入れて適応していくプロセスであると定義される。また、再発大腸がん患者としての特性において、再発を繰り返すため、長期に渡った心理的、身体的対処が必要であることや、発見が遅れた場合には既に進行している状態となり、そういった場合はがんと診断されたことへの心理的ダメージが大きいこと、また抗がん剤の種類は多いため、治療における選択肢が多く自己決定していく場面が多くなることやストーマを造設することで、ボディーイメージへの変容へ影響を来す場合があり、心理面の対処と身体面の影響がある。また、ストーマ手技を獲得することで家族やキーパーソンの支援が必要となることを考慮し概念分析していくことで、再発大腸がん患者のレジリエンスについては、“長期に渡り問題を向き合う忍耐力や力強さのもと、今後への不明瞭さや問題に対しても肯定的自己認識と今後への希望を忘れず、これからを精一杯生きるための前向きな意味づけを行い、再発体験の受容を促進する。後から後からやってくるストレスに対して、自身で自己決定する力へ家族との関係性の構築を高め、対処戦略を見出し、QOLの維持・向上を行い、目の前の状況に立ち向かうプロセスである。”と定義されると考えられ、がん患者におけるレジリエンスの定義とレジリエンスにおける定義の根幹として内容は一致していると言える。

大腸がんは、予後が他のがん種と比較しても比較的良好で、また治療も多岐に渡る。また罹患率の上でも男女ともに上位を占め、日本人にとって身近ながん種の一つである。しかしある程度がんが進行するまで無自覚であることが多く、発見時にすでに大腸がんが進行した状態であることも少なくない。またがんが進行していた場合には、再発転移のリスクが高まる。そういった

状況の中で、大腸がん患者はがんと共に生きる時間が長期間にわたる者も多く見受けられる。がんと診断されたことで大きな衝撃を受け、しかし精神的に何とか立て直し治療へと臨む。もし転移や再発が見られた場合には再度治療が再開され、更に自分の日常生活の再構築が必要とされる。精神的にも再発を経験する中で、自分自身の命の期限について考え不安な日々を過ごしている。こういった大腸がん患者の状況を臨床の現場でも知ることがあり、研究者はこれまでの研究で再発大腸がん患者が「生を支える力」を持ち生きていることを明らかにしてきた。国内外で大腸がん患者に対する研究は多く行われているが、大腸がん患者に関する研究として、大腸がんサバイバーとしてのある一時点の病期に着目し研究したものが多く見受けられ、大腸がん患者がたどった療養生活における体験の全てに焦点を当てた研究は見当たらない。レジリエンスについての研究も数多く見受けられるが、大腸がん患者に対する研究についてはほとんど見られない。乳がん患者に対するレジリエンスの研究は比較的多く見受けられるが、大腸がん患者の療養体験のレジリエンスに関する研究は見当たらなかったため、本研究の有用性があると考えられる。

<引用文献>

- 雑賀公美子、松田智大、柴田亜希子、西本寛ら、がん検診等由来の検診受診率と診断時のがん進行度との関係について、JACR Monograph 20、2014、11-19
- 向井未年子、大石ふみ子、大西和子、外来通院中の進行肺がん患者のストレス - コーピングとソーシャル・サポートの検討、三重看護学誌、14、2012、29-39
- 千葉理恵、宮本有紀、精神疾患を有する人のリカバリーに関連する尺度の文献レビュー、日本看護科学学会誌 29、2009、85-91
- 石井京子、近森栄子、高齢者の介護を行う家族のレジリエンス構造要素分析、ヒューマン・ケア研究 7、2006、64-72
- 川上あずさ、池田友美、藤岡敦子ら、看護学科生のレジリエンスの変化、兵庫大学論集 16、2011、39-44
- 仁尾かおり、藤原千恵子、先天性心疾患を持つ思春期にある人のレジリエンスの特徴、日本小児看護学会誌 15、2006、22-29
- 新田紀枝、川上智香、高城智圭ら、看護職者による患者家族のレジリエンスを引き出す支援とその支援に影響する要因、家族看護学研究 16、2010、46-55
- 若崎淳子、谷口敏代、掛橋千賀子、森将晏、成人期初発乳がん患者の術後のQOLに関わる要因の探索、日本クリティカルケア看護学会誌 3、2007、43-55

5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6 . 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7 . 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------